

A Researching Hiroshi Kawasaki through
Japanese Language Teaching Materials “Wani
no Ojisan no Takaramono”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-12-22 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大塚, 浩 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00029257

川崎 洋 研 究

——「わにのおじいさんのたからもの」の考察を中心に——

A Researching Hiroshi Kawasaki through Japanese Language
Teaching Materials “Wani no Ojiisan no Takaramono”

大塚 浩¹

Hiroshi OHTSUKA

(令和 4 年 11 月 30 日受理)

ABSTRACT

Hiroshi Kawasaki (1930-2004) was born in Tokyo of Japan. The first recorded example of his work *Wani no Ojiisan no Takaramono* ran in 1976 edition of Publishers by Fujinnotomoshia. Later, in 1976, he had his first work, *Wani no Ojiisan no Takaramono* officially published. A fuller, revised version *Wani no Ojiisan no Takaramono* was included.

The textbook version of *Wani no Ojiisan no Takaramono* was published by Kyouiku Publication and Gakko Publication in 1989. It was selected for the first time as a teaching material for students aged 8 years or older and aged 10 years or older. Since 1989.

The main issues examined in the research of Hiroshi Kawasaki, were the historical backdrop that the story was set against; the differences between the characters in the original version of *Wani no Ojiisan no Takaramono* and those in the school textbook version.

はじめに

小学校国語教科書教材としての「わにのおじいさんのたからもの」は、1976(昭和 51)年 2 月 1 日発行の「婦人之友」に短編連載された作品「ワニのおじいさんの宝物」(絵・和田誠)が初出テキストである。その後、1979(昭和 54)年 7 月 31 日にあかね書房から出版された『あかね創作童話 6 ぼうしをかぶったオニの子』収載の「ワニのおじいさんのたからもの」が初刊本テキストとなる。

小学校国語教科書教材としての「わにのおじいさんのたからもの」は、1989(平成元)年版の教育出版(小学校 2 年下)並びに学校図書(小学校 4 年上)を緒として、以後掲載され続けた。しかしながら、2002(平成 14)年度版では、教育出版並びに学校図書において「わにのおじいさんのたからもの」は姿を消す。これは、学校五日制の完全実施による学習内容の削減の影響を受けた国語教科書教材編成によるものであった。2005(平成 17)年版では、教育出版並びに学校図書において再掲載され、加えて大阪書籍(小学校 2 年下)においても掲載されている。

¹ 国語教育系列

本研究については、拙稿¹⁾において、川崎洋の作品「わにのおじいさんのたからもの」の考究を通し、初出テキストと初刊本テキストの比較、おにの子の帽子について、おにの子の人物像について、それぞれ考察を行ってきている。

そこで本稿では、「川崎洋研究」の一環として、作品「わにのおじいさんのたからもの」の考究を通し、わにのおじいさんの人物像について、何故わにのおじいさんは、おにの子に「たからもの」を上げようとしたのか、わにのおじいさんの言葉とおにの子の出発、崖の上の岩場に立つおにの子、について考察を進めていくものとする。

I. わにのおじいさんの人物像について

(1) 疲れ切ったわにのおじいさん

小学校国語教科書教材「わにのおじいさんのたからもの」では、川岸の水際で身動き一つせず眠り続けていたわにのおじいさんが目覚める場面について、次のように記されている。²⁾

「ああ、いい気もちだ。」

と、わには、つぶやきながら目をあけたのです。

「きみかい、はっぱをこんなにたくさんかけてくれたのは。」

「ぼくは、あなたがじっとしてうごかないから、しんでおいでかと思ったのです。」

「遠いところから、長い長いたびをしてきたものだから、すっかりつかれてしまってね。もう、ここまでくれば安心だと思ったら、きゅうにねむくなってしまってさ。ずいぶん何時間もねむったらしいな。ゆめを九つも見たんだから。」

そう言うと、わには、むあぁと長い口をいっぱいにあけて、あくびをしました。

「あの、わにのおじいさん？ それとも、おばあさんですか？」

「わしは、おじいさんだよ。」

「わにのおじいさんは、どうして、長い長いたびをして、ここまでおいでになったのですか？」

「わしをころして、わしのたからものをとろうとするやつがいるのでね、にげてきたってわけさ。」

臺野芳孝は、わにのおじいさんの人柄について、次のように述べている。³⁾

「朝だったのが昼になり、やがて夕方近くなって」「ああ、いい気もちだ」と目をあけるまで寝続けている。おそらくこの間もぴくりとも動かずにいたのであろう。よほど疲れていたか、長くくつろいでいたかである。わににも凶暴性や危険性は感じられない。「君かい、葉っぱをこんなにたくさんかけてくれたのは」と、わにの言葉づかいは少し気取った感じがする。また、この言葉には倒置法が使われていて、わにがおにの子に深く注目していることがわかる。そして、おにの子に感謝している。さらに、おにの子は帽子をかぶっているのであるから人間と勘違いしていると思われる。襲いかかろうという気配が全然ないことも、わにの性格が凶暴でないと分かる。

「遠い所から、長い長い旅をして」「ここまで来れば安心だ」と何者からか必死で逃げて来たことを、「…ね」「…さ」という気取った言い方で説明している。「わしをころして」「たから物を取ろうとするやつ」の存在さえ軽い調子で話している。わにの人生の波乱万丈さと、わにの強さを何気なく知らせている。

ここで臺野は、『朝だったのが昼になり、やがて夕方近くなって』『ああ、いい気もちだ』と目をあけるまで寝続けている。おそらくこの間もぴくりとも動かずにいたのであろう。よほど

疲れていたか、長くくつろいでいたかである。」と、眠り続けていたわにのおじいさんを評している。さらに、『遠いところから、長い長い旅をして』『ここまで来れば安心だ』と何者からか必死で逃げて来たことを、『…ね』『…さ』という気取った言い方で説明している。『わしをころして』『たから物を取ろうとするするやつ』の存在さえ軽い調子で話している」とし、こうした点から「わにの人生の波乱万丈さと、わにの強さ」を看取することができると言及している。

わにのおじいさんは、自分自身の掛け替えのない「たからもの」を守るため、長い長い逃避行を続けてきたのである。「もう、ここまでくれば安心だと思ったら、きゅうにねむくなってしまってさ。ずいぶん何時間もねむったらしいな。ゆめを九つも見たんだから。」というわにのおじいさんの述懐からは、「たからもの」を略奪する者によって、自由と人間性を奪われた環境から逃れ、新たな天地を探しながら苦難の旅を続けてきたことを窺い知ることができよう。わにのおじいさんの「たからものをとろうとするやつ」から逃れる旅は、恐怖と緊張を伴う困難な時間であったと推察することができる。

わにのおじいさんは、掛け替えのない自らの「たからもの」を守る中で、自分の命を狙う「たからものをとろうとするやつ」の悪巧みを見抜き難を逃れるため、相手の心を深く読み、注意深く慎重に思考し、自分自身を律しながら、冷静沈着に行動する必要があったと考える。わにのおじいさんは、自分自身に厳しく、誤魔化しや妥協を許さない峻厳さと、自らの意志を曲げない狷介さを併せ持つ人物であると考えることができよう。

(2) わにのおじいさんの洞察力

加藤憲一は、わにのおじいさんについて、次のように述べている。⁴⁾

読者は、〈わに〉がどれほど、〈たからもの〉を大事にしてきたかを、知っている。だから、ここでは、なぜ、それほど大事な、〈わに〉にとって〈かけがえのない〉〈たからもの〉を初めて会った他者である〈おにの子〉にあげようと決意したのか。この場面の授業は、そうした疑問が自然に湧き上がり、〈わに〉の〈まじまじと〉〈にこっと〉〈心おきなくあのよへ行ける〉〈目をつぶりました〉などの言動を表す語句を手がかりに追求される。

読者は冒頭から一貫して〈おにの子〉の人柄、人物像をその類比的な言動に焦点をおいて読み、共感してきているので、その判断には納得できる。しかしながら、それにしても、初対面の相手である。しかも、〈わに〉にとっても、読者にとっても〈かけがえのない〉〈もの・たからもの〉である。〈わに〉は、初対面で〈おにの子〉の人物を見抜いた慧眼の人物である。そして〈たからものとはどういうものか〉を、〈自分の目でたしかめるといい〉という教育的な配慮のできる人物でもある。

加藤は、わにのおじいさんを「〈かけがえのない〉〈たからもの〉を初めて会った他者である〈おにの子〉にあげようと決意した」人物であるとし、「初対面で〈おにの子〉の人物を見抜いた慧眼の人物である」と賞している。また、「〈たからものとはどういうものか〉を、〈自分の目でたしかめるといい〉という教育的な配慮のできる人物でもある」として、わにのおじいさんの人物像を把握している。

わにのおじいさんは、「たからもの」の概念や「たからもの」という言葉さえもを知らないおにの子に対し、これまで命懸けで守ってきた自らの「たからもの」を上げようと決断する。冷静沈着なわにのおじいさんが、初対面であるおにの子に、大切な「たからもの」を託そうとしたのである。自らの掛け替えのない「たからもの」の後継者として、おにの子を指名したわにのおじいさんの洞察力、先見性、決断力は、刮目に値するものである。

II. 何故わにのおじいさんは、おにの子に「たからもの」を上げようとしたのか

わにのおじいさんとおにの子は、初対面の二人である。ここでは、何故わにのおじいさんは、初対面のおにの子に、今まで命懸けで守ってきた「たからもの」を上げようとしたのか、について論を進めていきたい。

(1) わにのおじいさんの「たからもの」観

教材本文では、わにのおじいさんとおにの子の会話について、次のように記されている。⁵⁾

おにの子は、たからものというものが、どんなものなのだから知りません。たからものという言葉さえ知りません。

とんとむかしの、そのまたむかし、ももたろうがおにからたからものをそっくりもって行ってしまっただけというものは、おには、たからものとはぜんぜんえんがないのです。

「きみは、たからものというものを知らないのかい？」

わにのおじいさんは、おどろいて、すっとんきょうな声を出しました。

原田恵美子は、わにのおじいさんの「たからもの」観について、次のように述べている。⁶⁾

宝物といえば、一般的に金、銀、宝石などのようなものです。これは形あるものであり、使ったり、蓄えておいたりできるものです。だからこそ、奪おうという者が現れたり、隠さなければいけなかったり、時によっては、お話の中で〈「わしをころして、わしのたからものを取ろうとするやつがいるのでね、にげてきたってわけさ。〉とおじいさんが言っているように、殺されるかもしれないものです。宝物を持っているばかりに、逃げなければならないということもあるのです。(ここでの宝物は、用の価値と言えましょう。)

ここで原田は、「一般的に金、銀、宝石などのようなものです。これは形あるものであり、使ったり、蓄えておいたりできるものです。だからこそ、奪おうという者が現れたり、隠さなければいけなかったり、時によっては、お話の中で〈「わしをころして、わしのたからものを取ろうとするやつがいるのでね、にげてきたってわけさ。〉とおじいさんが言っているように、殺されるかもしれないもの」として、わにのおじいさんの「たからもの」の具体を推測し、「たからもの」を「用の価値」として把握している。

確かに、わにのおじいさんの「たからもの」は、場合によってはそれを巡って争いが起きたり、自分だけが占有しているという優越感、他の誰にも渡したくないという独占欲や執着心を生むものであると考えられる。つまり、わにのおじいさんにとっての「たからもの」とは、世間一般で価値あるものとして認知されている「もの」であり、自分だけが占有する物質的な「もの」であると言える。

広瀬節夫は、おにの子との会話におけるわにのおじいさんの驚きについて、次のように述べている。⁷⁾

わにのおじいさんは、「たから物という言葉さえ知りません」というおにの子に対して、⑨(「君は、たから物というものを知らないのかい?」)のように話しかけながら、驚きのあまり、「すっとんきょうな声」を出してしまう。つまり、物欲とは縁のない、おにの子の純粋な無欲さに驚嘆してしまったのである。

広瀬は、わにのおじいさんは「物欲とは縁のない、おにの子の純粋な無欲さに驚嘆し」たため、「驚きのあまり、『すっとんきょうな声』を出してしま」ったと説明している。「たからもの」とは、誰もが知っている概念であり言葉でもあるため、「たからもの」がどのようなものである

かという概念だけでなく、「たからもの」という言葉さえも知らないおにの子に対するわにのおじいさんの驚きは、想像に難くない。

わにのおじいさんの「たからもの」に対する執着心は、並大抵のものではない。わにのおじいさんは、自らの「たからもの」を大切に守りながら歳月を重ねてきており、常に「たからもの」の存在を意識しながら、見方を変えれば「たからもの」という存在に縛られながら生きてきたとも考えられよう。

更にそれだけではなく、わにのおじいさんは長い間、「たからものをとろうとするやつ」から自身の命を狙われており、その追っ手の執拗な追跡から身を守りながら逃げ続けてきている。わにのおじいさんは、自らの掛け替えのない「たからもの」を守るため、長期間、心の安まることのない命懸けの生活を余儀なくされてきたのである。

(2) わにのおじいさんの疑心

では、何故わにのおじいさんは、これまで大切に守り続けてきた掛け替えのない「たからもの」を、初対面のおにの子に上げようとしたのであろうか。教材本文では、わにのおじいさんについて、次のように記されている。⁸⁾

わにのおじいさんは、おどろいて、すっどんきょうな声を出しました。

そして、しばらくまじまじとおにの子の顔を見ていましたが、やがて、そのしわしわくちゃくちゃの顔で、にこっとしました。

「きみに、わしのたからものをあげよう。うん、そうしよう。これで、わしも心おきなくあのよへ行ける。」

高橋龍夫は、わにのおじいさんの心境について、次のように述べている。⁹⁾

ところで、「たからもの」を知らないオニの子に対し、当然、ワニのおじいさんは驚くわけだが、その真偽を探るように「しばらくまじまじ」とオニの子の顔を見ている。やがて、「にこっと」するのは、オニの子の表情から本当に「たからもの」を知らないと見て取ったからであろう。ワニのおじいさんはオニの子の無垢さに感動したかのように「わしのたからものをあげよう。うん、そうしよう。」と言う。「うん、そうしよう。」という自己確認は、「たからもの」の価値を前提とするワニのおじいさんにとっては、それを無欲なオニの子に譲ることが自ら納得のいく判断だったのである。欲望の固まりと化した人間に追いかけられた後のオニの子との出会いは、ワニのおじいさんにとっても新鮮な喜びであったに違いない。

ここで高橋は、『たからもの』を知らないオニの子に対し、当然、ワニのおじいさんは驚くわけだが、その真偽を探るように『しばらくまじまじ』とオニの子の顔を見ている」と捉えている。わにのおじいさんが、『にこっと』するのは、オニの子の表情から本当に『たからもの』を知らないと見て取ったから」とであると指摘している。さらに、わにのおじいさんの「うん、そうしよう。」は、『たからもの』の価値を前提とするワニのおじいさんにとっては、それを無欲なオニの子に譲ることが自らの納得のいく判断だった」とする「自己確認」として言及している。

ここでは、わにのおじいさんが、おにの子に向けた「まじまじ」という言語表現に着目したい。このわにのおじいさんの視線である「まじまじ」は、「しばらく」の間、おにの子の顔に注がれている。わにのおじいさんがおにの子に注いだ「まじまじ」は、わにのおじいさんからおにの子に向けられた「疑心」ではなからうか。

思わず素っ頓狂な声を出したわにのおじいさんは、本当におにの子が「たからもの」という

ものがどんなものなのかということだけでなく、真に「たからもの」という言葉さえも知らないのかを、疑心を持って確かめようとしたと考える。このおにの子に向けた視線「まじまじ」には、「たからもの」を知らないおにの子の存在が俄に信じ難いと疑念を抱く、わにのおじいさんの心持が如実に表現されていると考える。

わにのおじいさんのおにの子の顔に注がれた視線「まじまじ」が、短時間ではなく、「しばらく」の間、継続して注がれていたことにも留意したい。この「しばらく」という時間的空間には、おにの子を俄に信じ難く訝しがらるわにのおじいさんの疑念と、自らの先入観を排除した上で、おにの子の人品骨柄を慎重に吟味し、その真偽を見極めようと検分しているわにのおじいさんの真剣な眼差しを見て取ることができる。わにのおじいさんは、おにの子が、生死の判然としない状況の中であっても、自分自身のために朴の木の大きな葉を朝から夕方近くになるまで、献身的に体の周りに積み上げて体の半分ほどが埋まるまで運んでくれたことや、これまでの両者の会話の遣り取りから感じたおにの子の人の柄や目の前のおにの子の態度等から総合的に判断して、おにの子が辻褄合わせの虚偽を述べているとは全く感じられなかったのであろう。

わにのおじいさんは、おにの子は本当に「たからもの」というものがどんなものなのかということだけでなく、「たからもの」という言葉さえも知らないのだと合点し、おにの子の無欲さや純粋さに驚きながらも得心したのではなからうか。

(3) わにのおじいさんの「うん、そうしよう。」

松本修は、わにのおじいさんの価値観について、次のように述べている。¹⁰⁾

わにのおじいさんがおにの子と接した時間は決して長くありません。それどころか、おにの子はわにのおじいさんが死んでいると誤解していました。わにのおじいさんが、長年隠してきたたから物をあげる理由として、おにの子の行動と様子はいささか説得力に欠けます。その中で子どもたちは、分かりやすいおにの子の行動に「優しい」という印象を結びつけて、わにのおじいさんがたから物をあげる理由を説明してしまいがちです。重要なことは、おにの子の様子を受け止めるわにのおじいさんの境遇や事情です。たから物について知らないおにの子よりも、そのことを一般的なたから物に対する考えや価値観を覆すものとして受け止めた、わにのおじいさんに着目する必要があります。わにのおじいさんにとってたから物は、命をねらわれる理由であり、もはや自分も他人もたから物にとらわれた存在と言えます。そんなわにのおじいさんにとって、おにの子の無知ゆえに執着しない様子は、自由や純粋という真新しさになります。

ここで松本は、国語の授業において本教材を取り扱う場合、「子どもたちは、分かりやすいおにの子の行動に『優しい』という印象を結びつけて、わにのおじいさんがたから物をあげる理由を説明してしまいがち」であると、安易な読みに警鐘を鳴らしている。さらに松本は、「重要なことは、おにの子の様子を受け止めるわにのおじいさんの境遇や事情」であると述べ、「たから物について知らないおにの子よりも、そのことを一般的なたから物に対する考えや価値観を覆すものとして受け止めた、わにのおじいさんに着目する必要がある」と主張している。

こうした松本の主張に首肯したい。本教材を取り扱う場合、わにのおじいさんが、おにの子に掛け替えのない「たからもの」を上げる理由として、おにの子の行動と優しさを結びつけて情緒的な読みの帰結を図るのではなく、「たからもの」に対するおにの子の考えや価値観に注目し、それを受け止め・受け入れたわにのおじいさんにこそ考察の光を当て、教材の文章表現に根拠を据えた論理的な読みを実現することも一考ではなからうか。

さらに中垣清人は、「たからもの」と鬼との関係について、次のように述べている。¹¹⁾

そう考えていくとなかなか意味深い表現がある。例えば、〈むかし、ももたろうがおにからたからものをそっくりもって行ってしまってからというもの〉というくだりは、この物語の世界では、おにというものがももたろうに登場するおにと同様に、悪事を働き、退治されるべきものと見られているということを示しているし、わにのおじいさんがおにの子を、〈まじまじ〉と見て〈わしのたからものをあげよう〉と語る場所は、そのような、「おに」という固定化された見方ではなく、心やさしき人間としておにの子の本質を見抜いた故ということになるだろう。

中垣は、作品本文中の「〈むかし、ももたろうがおにからたからものをそっくりもって行ってしまってからというもの〉というくだりは、この物語の世界では、おにというものがももたろうに登場するおにと同様に、悪事を働き、退治されるべきものと見られているということを示している」と述べている。また、「わにのおじいさんがおにの子を、〈まじまじ〉と見て〈わしのたからものをあげよう〉と語る場所は、そのような、『おに』という固定化された見方ではなく、心やさしき人間としておにの子の本質を見抜いた故」であると把握している。

ここでは、わにのおじいさんの「うん、そうしよう。」という言語表現に着眼したい。この「うん、そうしよう。」は、わにのおじいさんがおにの子に「たからもの」を上げようと決意した発言「きみに、わしのたからものをあげよう。」に続いて、間髪を入れずに発せられている。つまり、わにのおじいさんは、自らの決断に大きく頷きながら、「うん、そうしよう。」と発言しているのである。

わにのおじいさんは、自らの「きみに、わしのたからものをあげよう。」という決断に対し、大きな満足感を持っていると考える。わにのおじいさんは、「うん、そうしよう。」と頷きながら言語化することで、改めて大切な「たからもの」をおにの子に託そうとする自分自身の判断が、納得のいく正しいものであったと反芻しながら再確認しているのである。わにのおじいさんは、自らの「たからもの」を狙う略奪者との殺伐とした攻防の中で、辛く悲しい時間を過ごしてきた。しかしながら、わにのおじいさんにとって、無欲で純粋なおにの子との出会いは、これまでの「たからものをとろうとするやつ」との熾烈な攻防における、駆け引きや騙し合いの中で擦れて汚れてしまった自らの心が、次第に清らかに浄化されいくような、安らかで穏やかな満ち足りた時間を齎してくれたのではあるまいか。

また、わにのおじいさんの「これで、わしも心おきなくあのよにへ行ける」という言葉からは、長い間、良きも悪しきも束縛されてきた「たからもの」から解放された安堵の思いが感じ取れる。まさに、わにのおじいさんが「きみに、わしのたからものをあげよう。うん、そうしよう。」と頷いた場面は、長年背負ってきた「たからもの」という桎梏から解放された瞬間であったと言えよう。

Ⅲ. わにのおじいさんの言葉とおにの子の出発

(1) 「きみの目でたしかめるといい」

わにのおじいさんは、自らの掛け替えのない「たからもの」をおにの子に上げようと決断した。教材本文では、決断後のわにのおじいさんについて、次のように記されている。¹²⁾

わにのおじいさんのせなかのしわが、じつは、たからもののかくし場所をしるした地図になっていたのです。

わにのおじいさんに言われて、おにの子は、おじいさんのせなかのしわ地図を、しわのない紙に書きうつしました。

「では、行っておいで。わしは、このはっぱのふとんでもうひとねむりする。だからものってどういうものか、きみの目でたしかめるといい。」

そう言って、わにのおじいさんは目をつぶりました。

高橋龍夫は、わにのおじいさんの言葉である「きみの目でたしかめるといい」について、次のように述べている。¹³⁾

実際、ワニのおじいさんは「だからものってどういうものか、きみの目でたしかめるといい。」と言って、オニの子に「だからもの」という言葉の指す意味内容の確認を促している。

ここで高橋は、「『だからものってどういうものか、きみの目でたしかめるといい。』と言って、オニの子に『だからもの』という言葉の指す意味内容の確認を促している」と説明している。わにのおじいさんは、おにの子に「だからもの」とはどのようなものなのかを自分自身の目で判断させるために、「きみの目でたしかめるといい。」という言葉を投稿掛けたのである。

わにのおじいさんは、おにの子に背中中の皺地図を写させただけで、道中の注意点や「だからもの」の内容については、一切口にしていない。この「きみの目でたしかめるといい。」というわにのおじいさんの発言には、他者が一方的に「だからもの」の内容を教え込んだり、「だからもの」の価値を植え付けたりするのではなく、おにの子自身が自分の目で「だからもの」を確認し、自分自身の価値基準で「だからもの」の内実を吟味した上で価値付けて欲しいという、わにのおじいさんの願いが込められていると考える。

(2) 険しい道程

おにの子は、わにのおじいさんの背中中の皺地図を皺のない紙に写した地図を見ながら、険しい道を進んでいく。加藤憲一は、険しい道を進むおにの子について、次のように記している。¹⁴⁾

「おにの子は、地図を見ながら、とうげをこえ、けもの道をよこ切り、つりばしをわたり、谷川にそって上り、岩あなをくぐりぬけ、森の中で何度も道にまよいそうになりながら、やっと地図の×じるしの場所へたどりつきました。」と、一文で息もつかず、話者は〈おにの子〉の行動を語る。この語り方から、ただひたすらに、ひとつひとつの難所を越えて、休むことなく、切り立つようながけの岩場の目的地を地図で探しながら歩いていく〈おにの子〉の姿がイメージできる。読点の打ち方に気をつけて、音読させることで、〈わに〉の信頼をうけた小さな〈おにの子〉の不屈でひたむきな行動力、難所をひとつ超えては、又つぎへと向かっていく息づかいさえ体感されるのではないか。 (中 略)

ところで、なぜ、そうまでして行動するのか。〈だからもの〉自体は、見たこともない、従って〈おにの子〉にとっての価値は感ずることはできない。しかし〈他者〉にとっての価値あるものを託されたその信託に応えることが〈おにの子〉にとっての〈かけがえのない〉価値だからこそ、その目的に向かってこのひたむきな行動ができるのである。まさに〈価値ある〉目的に、主体的に生きる行動力あふれる人物像である。好奇心の強い〈おにの子〉だからこそその行動力ともいえる。〈わに〉が命がけで守り、〈おにの子〉が不屈にさがして辿りついた〈だからものとは、一体どういうものか〉という期待が、読者に高まる。

ここで加藤は、「ただひたすらに、ひとつひとつの難所を越えて、休むことなく、切り立つようながけの岩場の目的地を地図で探しながら歩いていく〈おにの子〉の姿がイメージできる」

とし、「小さな〈おにの子〉の不屈でひたむきな行動力、難所をひとつ超えては、又つぎへと向かっていく息づかいさえ体感」することができると思えている。さらに加藤は、「たからもの」自体は、見たこともない、従って〈おにの子にとっての価値〉は感ずることはできない。しかし〈他者にとっての価値〉あるものを託されたその信託に応えることが〈おにの子〉にとっての〈かけがえのない〉価値だからこそ、その目的の向かってこのひたむきな行動ができるのである。まさに〈価値ある〉目的に、主体的に生きる行動力あふれる人物像である。」と言及している。

では何故、おにの子は、これほど険しい道程を前へ前へと突き進もうとしたのであろうか。おにの子が、森の中で何度も道を見失いながらも、険しい道程に歩を進めた理由は、二つあると考える。すなわち、一つ目は、「わにのおじいさんの信託に応える」ためであり、二つ目は、おにの子の「たからものに対する強い興味・関心」がそれである。

まず一つ目の理由である、「わにのおじいさんの信託に応える」ためについて述べたい。おにの子は、わにのおじいさんの信託に誠実に応えることに価値を見出したからこそ、険しく困難な道りを直向きに乗り越え、前進し続けることができたのであろう。おにの子がわにのおじいさんの信託に応えることに価値を見出した根源は、誰かに信頼され何かを託されたこと自体が、おにの子にとって初めての経験であったからであると考えられる。

次に二つ目の理由である、おにの子の「たからものに対する強い興味・関心」について述べたい。おにの子は、「たからもの」というものがどのようなものなのかという概念だけでなく、「たからもの」という言葉さえも知らない。おにの子は確かに無欲で純粹であるが、「たからもの」に対する興味・関心を抱いていない訳ではない。おにの子は、「たからもの」の隠し場所を示したわにのおじいさんの背中の皺地図を、素直に皺のない紙に書き写している。「たからものってどういうものか。きみの目でたしかめるといい。」というわにのおじいさんの言葉を受け、「たからもの」の在処を求めて、数々の困難を乗り越えながら険しい道程を突き進んでいく。おにの子は、辛く険しい道中であっても決して弱音を吐かず、そして途中で諦めて断念せずに前へ前へ歩みを進めている。ここには、おにの子の「たからもの」への飽く無き探求心を見て取ることができよう。わにのおじいさんの「たからもの」とは、どのようなものであるのかを自分自身の目で確かめ、明らかにしたいというおにの子の「たからものに対する強い興味・関心」を垣間見ることができる。

IV. 崖の上の岩場に立つおにの子

(1) 帽子を取るおにの子

おにの子は、地図を見ながら険しい道りを経て、やっと×印の目的地に辿り着くことができた。教材本文では、その目的地について、次のように記されている。¹⁵⁾

そこは、切り立つようながけの上の岩場でした。

そこに立った時、おにの子は目をまるくしました。口で言えないほどうつくしい夕やけが、いっぱい広がっていたのです。

思わず、おにの子はぼうしをとりました。

これがたからものなのだ——と、おにの子はうなずきました。

ここは、せかいじゅうでいちばんすてきな夕やけが見られる場所なんだ——と思いました。その立っている足もとに、たからものを入れたはこがうまっているのを、おにの子は知り

ません。

おにの子は、いつまでも夕やけを見ていました。

広瀬節夫は、夕焼けを見たおにの子について、次のように述べている。¹⁶⁾

あたりいっぱい広がった美しい夕焼けを見て、おにの子は目をまるくしてしまった。しかも、思わず、ぼうしをとってしまったのである。おにの子は、「目をまるく」して驚き、「ぼうしをと」って敬けんな気持ちを表さざるをえなかったのであろう。いわば、美の極致である、「美しい夕焼け」を見て、純朴なおにの子は、「これがたから物」だと納得してしまう。しかも、そのおにの子は、自分の立っている足もとに、たから物を入れたはこが埋められていることを知らない。

広瀬は、「おにの子は目をまるくしてしまった。しかも、思わず、ぼうしをとってしまったのである。おにの子は、『目をまるく』して驚き、『ぼうしをと』って敬けんな気持ちを表さざるをえなかった」と把握している。

おにの子は、切り立った崖の上の岩場に立って夕焼けを見た時、「目をまるく」して驚き、「口で言えないほど」の美しさに見惚れ、感動している。そして、この「口で言えないほどうつくしい夕やけ」こそが、わにのおじいさんの「たからもの」なのだ確信する。おにの子は、わにのおじいさんから貰った、美しく掛け替えのない「たかもの」の夕焼けを前に、敬虔な気持ちを表さざるを得なかったのであろう。おにの子は、被っていた帽子を「思わず」、取ったのである。

勝倉壽一は、この場面のおにの子について、次のように述べている。¹⁷⁾

眼前に広がる壮大な夕焼けを前に、オニの子は「思わず」帽子を取って見とれている。その時、オニの子の心からは「鬼」であることも、鬼ヶ島の桃太郎との過去も全て忘却されている。桃太郎が鬼ヶ島の財宝の全てを持ち去ったことにより、オニの子は宝物という言葉も知らぬほどに物欲と無縁な清浄な心の持ち主になっていたが、「鬼」という存在への警戒と忌避の目を逃れることはできなかった。しかし、夕焼けの美しさの前にオニの子はそのような卑屈な感情を忘却し、敬虔な気持ちで大自然と一体になることができたのだ。

勝倉は、「眼前から広がる壮大な夕焼けを前に、オニの子は『思わず』帽子を取って見とれている。その時、オニの子の心からは『鬼』であることも、鬼ヶ島の桃太郎との過去も全て忘却されている」と主張している。また、おにの子は、「夕焼けの美しさを前に」して、「卑屈な感情を忘却し、敬虔な気持ちで大自然と一体になることができた」と捉えている。

ここでは、夕焼けを前にしたおにの子の行動である、「思わず、おにの子はぼうしをとりました。」という文章表現に着目したい。おにの子は、「口で言えないほどうつくしい夕やけ」を前にして、「思わず」帽子を取った時、これまで片時も忘れずに被っていた帽子の存在を、意識外に置いてしまっている。おにの子にとって帽子を被るという行為は、自らの頭の角を隠すために必要不可欠な動作であり、その一方で、おにの子にとって帽子を取るという行為は、自分が鬼であることを他者に悟られてしまう可能性があるため、決して行ってはならない動作であったはずである。

おにの子は、これまでの人間社会との関わりの中で、自分の頭に角が生えているというだけで忌み嫌われたり、理不尽な振る舞いされたり、身に覚えのない不当な扱いをされたりする等の言い知れぬ辛酸をつぶさに嘗めてきたのであろう。おにの子は、自分が鬼であることを他者に悟られないように、頭の角を隠す方策として常に帽子を被り、世間から目立たぬよう蔭に隠

れた生き方をせざるを得なかったのである。

しかしながら、おにの子が「思わず」ながらも、これまで世間からの数々の理不尽な振る舞いや不当な迫害を受けるたびに学習し、身を守るために片時も離さず被り続けてきた帽子を、ここで自ら取ったという行為は、今後の新しいおにの子の生き方を予感させるものであると考えるのである。

(2) これが「たからもの」なのだと言っておにの子

西郷竹彦は、夕焼けを見るおにの子について、次のように述べている。¹⁸⁾

おにの子にとって、この夕やけがいかによかったかということです。夕やけなんかみても感動しない人もいます。そういう人は、美しいものとかすばらしいものとかに感じない心をもっているのです。このおにの子は、自分の胸の中にすばらしい宝をもっているのです。そういうものをすばらしいものと感じる心です。

実はすでにおにの子は、ここへ来るまでの間に、すばらしい心(宝)をもっていたのです。どんな宝かというと、わにのおじいさんが死んでいると思ったら、丁寧にほおの木の葉っぱでつつんであげる。これは、おにの子のもっている宝です。宝とは、やさしい心、ナイーブな心、美しい心です。そういう心が、夕やけの美しさを美しいとかすばらしいと感じるので、宝物というのは、外に物としてあるというよりも、そういうものをすばらしいものとして感じる心です。それが、つまりおにの子にとっての宝物なのです。ですから、立っている足もとに、いわゆる世間でいうところの宝物が入った箱があろうとなかろうと、そんなことはどうでもいいことです。

ここで西郷は、「すでにおにの子は、ここへ来るまでの間に、すばらしい心(宝)をもっていたのです。どんな宝かというと、わにのおじいさんが死んでいると思ったら、丁寧にほおの木の葉っぱでつつんであげる。これは、おにの子のもっている宝」であるとし、「宝とは、やさしい心、ナイーブな心、美しい心」であると規定している。さらに「宝物というのは、外に物としてあるというよりも、そういうものをすばらしいものとして感じる心です。それが、つまりおにの子にとっての宝物なので」と主張している。

また加藤憲一は、「たからもの」の価値について、次のように述べている。¹⁹⁾

読者から見ると、〈ものに感ずるこの心〉こそ〈おにの子〉にとっての〈かけがえのないから〉であると思えてくる。この〈すばしいから〉は、〈はじめ〉から一貫している。眠っている〈わに〉に声をかけ、ほおの葉でつつむ、やさしくナイーブで美しい心が、〈うつくしい夕やけ〉を〈たから〉と感じる心へと破綻なく連続しているのである。

〈おにの子〉のこうした常識を変換した見方は、非常識ではなく、結果として、実は現代批評に通じる反常識としての意味を持つ。この反常識は、読者の〈たからもの〉観を揺さぶり、〈かけがえのない〉〈真のたからもの〉とは何かを問い、読者の固定的な〈ものの価値〉観の変容を迫る。そして、同時に、人物のものの見方・考え方・生き方を通して、人間認識のありようについて深く考えさせる。

つまり、この物語を教材として、作者の凝らした様々な仕掛けの面白さ、味わいに文芸体験させつつ、その衝撃力によって、〈もの〉の価値、人間観について学ばせることが可能である。

加藤は、「〈おにの子〉のこうした常識を変換した見方は、非常識ではなく、結果として、実は現代批評に通じる反常識としての意味を持つ。この反常識は、読者の〈たからもの〉観を揺

さぶり、〈かけがえのない〉〈真のたからもの〉とは何かを問い、読者の固定的な〈ものの価値〉観の変容を迫る。そして、同時に、人物のものの見方・考え方・生き方を通して、人間認識のありようについて深く考えさせる」と把握している。

作品「わにのおじいさんのたからもの」は、読者に「たからもの」に対する概念規定を問い直させているのである。世間一般の「たからもの」の価値基準は、わにのおじいさんが命懸けで守ってきた物質的な「もの」である。物質的な「もの」に価値を見出してきたわにのおじいさんと、精神的な喜びに価値を見出してたおにの子との「たからもの」観の擦れ違いを通して、読者は「たからもの」という言葉の概念自体の問いに直面する。世間一般でいう金や銀や宝石等のような物質的に価値のあるものだけが「たからもの」ではなく、おにの子のつけた美しい夕焼けやおにの子の優しさ、美しいものを美しいと思える心の美しさも「たからもの」として価値付けることができることに気付かされるのである。

また、おにの子の「ものの見方・考え方・生き方」を通して、他者に見返りを求めない献身的な優しさや、美しいものに素直に感動できる心の美しさが、人間として大切なことであると改めて認識する。作者はおにの子の姿を通して、人間として大切なことは何かを、我々に問い掛けているのであろう。

(3) 他者を信じること

おにの子は、自分自身の頭の角を隠すために、常に帽子被って時間を過ごしてきている。それは、自分が「おにの子」であるというだけで、世間から忌み嫌われたり、理不尽な振る舞いを受けたり、身に覚えのない不当な扱いをされたりする等、数えきれない程の辛く悲しい仕打ちを受けてきた経験則から編み出した、おにの子の処世術である。おにの子は、自分の頭に角が生えているというだけで、ある時は他者から虐げられ、ある時は謂れの無い非難を一身に受けてきたのであろう。他者からの罵声や冷たい視線に怯えながら、人間不信（他者不信）に陥ったおにの子は、自分が「おにの子」であることを悟られないように、自らの頭の角を隠すために常に帽子を被り、世間から目立たぬよう蔭に隠れた生き方をせざるを得なかったのである。

わにのおじいさんの「たからものってどういうものか、きみの目でたしかめるといい。」という発言を受けたおにの子は、そのわにのおじいさんの言葉を信じ、険しく困難な道程に苦戦しながらも、決して諦めずに歩を進め、やっとの思いで「たからもの」の隠し場所である切り立つような崖の上の岩場に辿り着く。切り立つような崖の岩場に立ったおにの子は、口では言えない程の美しい夕焼けを前にし、思わず帽子を取るのである。そして、「これがたからものなんだ——」と頷きながら、わにのおじいさんから託され、探し求めてきた「たからもの」に辿り着いたことを確信するのである。

おにの子が「思わず」ながらも、これまで世間からの数々の理不尽な振る舞いや不当な迫害を受けるたびに学習し、身を守るために片時も離さず被り続けてきた帽子を、ここで自らの手で取ったという行為に着眼したい。おにの子は、世界中で一番素敵なた焼けに見惚れながら、わにのおじいさんの意を体して、険しく困難な道程を前へ前へ歩を進めてきたからこそ、こんなにも美しく、世界中で一番素敵な「たからもの」を見つけることができたのだと感じているはずである。それは、「おにの子は、いつまでも夕やけをみていました。」という作品終末部の文章表現からも看取することができる。

おにの子は、切り立った崖の上の岩場に立って世界中で一番素敵なた焼けを見つめながら、わにのおじいさんとのふれあいを通して学んだ、「他者を信じること」の大切さと素晴らしさに

気付いたのでなかろうか。おにの子は、「たからもの」である世界一美しい夕焼けと共に、「他者を信じる心の萌芽」を手に入れることができたと考えるのである。

【引用文献】

- 1) 大塚浩稿「小学校国語教科書教材基盤研究—「わにのおじいさんのたからもの」の考察を通して—」、『静岡大学教育学部研究報告（教科教育学篇）』第53号、2021年12月、1～11頁
- 2) 『国語二下』、教育出版株式会社、2000年1月、37～38頁
- 3) 臺野芳孝稿「物語『わにのおじいさんのたから物』（川崎洋）」、『国語科小学校・中学校新教材の徹底研究と授業づくり』、学文社、2005年8月31日、34～35頁
- 4) 加藤憲一稿「ものの価値と人間認識に迫る—美的体験を通して—」、田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 小学校編2年』、教育出版株式会社、2001年3月16日、149頁
- 5) 前掲2)の文献、39頁
- 6) 原田恵美子稿「『わにのおじいさんのたからもの』の授業 川崎洋作」、『新版 文芸の授業・小学校2年』、明治図書出版株式会社、1997年4月、92頁
- 7) 広瀬節夫著『子供の読みを育てる文学の授業』、溪水社、1997年6月1日、65頁
- 8) 前掲2)の文献、39～40頁
- 9) 高橋龍夫稿「＜感性の時代＞の物語—川崎洋の詩的世界—」、田中実・須貝千里編『文学の力×教材の力 小学校編2年』、教育出版株式会社、2001年3月16日、129～130頁
- 10) 松本修・西田太郎著『3年 わにのおじいさんのたから物 川崎洋』、学校図書株式会社、2018年6月26日、60頁
- 11) 中垣清人稿「わにのおじいさんのたからもの（川崎洋）」、「国語の手帳」27号、明治図書出版株式会社、1990年1月1日、65頁
- 12) 前掲2)の文献、40～41頁
- 13) 前掲9)の文献、130頁
- 14) 前掲4)の文献、150頁
- 15) 前掲2)の文献、41～43頁
- 16) 前掲7)の文献、63頁
- 17) 勝倉壽一著『小学校』の文学教材は読まれているか—教材研究のための素材研究』、銀の鈴社、2014年1月31日、38頁
- 18) 西郷竹彦著『西郷竹彦全集 文芸・教育 第八巻 文芸の世界Ⅱ 童話・物語』、恒文社、1996年9月10日、211～212頁
- 19) 前掲4)の文献、152頁